

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第2集

# 羽黒平(I)遺跡

五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査

昭和55年度

浪 岡 町

浪岡町教育委員会

## 序

浪岡町は津軽でも古い土地がらで、数多くの遺跡が町全域にわたって分布しています。

特に室町時代には南朝の名門、北畠氏が城を築き栄えたという歴史をもち、（浪岡城跡は昭和15年史跡として国の指定を受ける。）これら歴史的背景の中で町民の日常生活が営まれています。

近年、町民の文化財に対する関心は高く、さらにこの保護意識の高まりつつあることは、非常に喜ばしいことあります。

しかし、町民生活形態の著しい変化は、これら文化財に変化を与えるにはいません。

本書は、昭和55年度、浪岡町がりんご生産農家の生産効率向上を図るため実施した、五本松地区樹園地農道整備事業に係わる、羽黒平遺跡の発掘調査報告であります。

限られた期間に発掘した調査であるので、必ずしも十分とはいえないが、先人の生活を知るうえで、少しでも役立つならば幸いであります。

なお、調査及び報告書刊行にあたり、御指導いただきました関係各位に心から感謝の意を表し、あわせて、今後とも、一層の御協力と御指導をお願い申し上げます。

昭和56年3月

浪岡町教育委員会

教育長 村上良民

## 凡 例

1. 本報告書は、五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査で、昭和55年4月21日から4月30日までの実質6日間おこなわれた調査の報告である。
2. 本書は、本文5項目、挿図(Fig.)7枚、(PL.)5枚をもって構成し、執筆は工藤と棟方が担当して、末尾に担当者を表わした。
3. 本書を作製するにあたり、下記の方々ならびに諸機関のご指導を受けた。記して謝意を表するしだいである。

青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、弘前大学教授村越潔氏、弘前大学考古学研究室。

## 目 次

I 調査にいたる経緯	1
II 調査の経過（調査日誌より）	2
III 遺跡の立地と環境	6
IV 検出遺構と遺物	13
(1)発掘区の層序	13
(2)検出遺構	13
(3)出土遺物	13
V まとめ	19

## 挿 図 (Fig.) 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡（50,000 分の 1）	5
Fig. 2 発掘調査区（2,500分の1）	5
Fig. 3 グリッド配置図（100分の1）	7・8
Fig. 4 B-1 区、C-1 区実測図	9・10
Fig. 5 D-1 区、E-1 区、F-1 区、G-1 区実測図	11・12
Fig. 6 遺物実測図 (1)	15
Fig. 7 遺物実測図 (2)	17

## 図 版 (P.L.) 目 次

PL. 1 ①発掘区遠景 ②昭和52年度発掘区遠景 ③発掘区全景 ④埋め戻し終了後の状況	21
PL. 2 ①②B-1 区発掘状況 ③④⑤C-1 区発掘状況	22
PL. 3 ①②③E-1 区発掘状況 ④G-1 区発掘状況	23
PL. 4 ①C-1 区焼土検出状況 ②C-1 区遺物出土状態 ③④⑥土師器写真	24
PL. 5 遺物写真	25

表 1 出土遺物 挿図・図版対比表	18
-------------------	----

## I 調査にいたる経過

羽黒平遺跡（I）〔県遺跡台帳 29017〕は、昭和52年東北縦貫自動車道建設に伴い、県教育委員会文化課の手によって発掘調査がおこなわれている。その時は、道路建設予定地という狭い範囲にもかかわらず、平安時代を主体とする遺構・遺物が数多く検出されている。特に堅穴住居跡の中には、壁板が炭化状態で残存していたものや、製鉄遺構としての鍛冶場跡なども検出され、大規模な集落跡として周知されるところとなった。

今回、浪岡町では五本松地区における樹園地農道整備事業を実施するにあたり、主管課の土地改良課では工事実施区域が羽黒平遺跡（I）に含まれる事を知り、県担当部局とともに対策を講ずべき所となった。昭和54年11月には、県教育庁文化課・県土地改良課・町教育委員会社会教育課・町土地改良課による合同の現地事前調査をおこない、遺跡の範囲に包含されることを再確認している。当初、県教育庁文化課の担当で調査されることが検討されたが、諸般の事情のため、町教育委員会社会教育課に担当が依頼されることになった。

町教育委員会では、担当の了解とともに、発掘調査実施に関する細部にわたって調査主体者と検討を重ね、調査体制をととのえた。その結果、昭和55年3月31日下記の協議事項がとりかわされた。

### 羽黒平遺跡発掘調査に係わる協議

発掘主体者（以下甲とする）を浪岡町、発掘担当者（以下乙とする）を浪岡町教育委員会として、五本松地区樹園地農道整備事業に係わる埋蔵文化財発掘調査について次のとおり協議する。

#### （協議内容）

第1条 協議内容は次のとおりとする。

##### （1）協議業務の名称

羽黒平遺跡埋蔵文化財発掘調査

##### （2）協議業務の内容

土木工事予定地における埋蔵文化財の発掘調査と確認調査及び報告書の作製。

##### （3）協議業務実施期間

昭和55年4月1日～昭和56年3月31日

#### （協議業務の調査）

第2条 甲は必要と認める時、乙に対し協議業務の進行状況について報告を求めることがある。

第3条 乙は協議業務を完了した時、完了通知書と共に、調査報告書を甲に提出する。甲は提出された調査報告書を直ちに検査し、異議のある時は遅滞なく通知する。その措置については、双方別に協議して定める。

(調査費用の負担と支払)

第4条 調査費用の負担と支払は、甲がおこなう。

(疑義等の決定)

第5条 この協議に定めのない事項及びこの協議に関し疑義が生じた時は、そのつど双方が話し合い解決にあたる。

昭和55年3月31日

発掘主体者 浪岡町長 平野良一

発掘担当者 浪岡町教育委員会 教育長 村上良民

(関係法規)

文化財保護法 第98条の2

町教育委員会は、さっそく協議事項に基づき、下記の調査要項を作製し、第1回調査員打合せ会の開催と現地確認を併行しておこなった。

### 羽黒平遺跡発掘調査要項

1) 調査の目的

浪岡町大字五本松地区の樹園地農道整備事業に伴い、周知の遺跡として遺跡台帳に記載する羽黒平遺跡(1)〔29017〕の埋蔵文化財に破壊の危険があるため、遺構・遺物の確認を主観点に、記録保存の意味からおこなう緊急発掘調査である。

2) 遺跡の所在地

青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字平野123-2、他

3) 調査の期間

昭和55年4月15日～5月31日（整理作業も含む）

4) 調査の主体者

浪岡町 土地改良課

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稻村101-1

5) 調査の担当者〔事務局〕

浪岡町教育委員会〔社会教育課〕

6) 調査員等

a. 調査員

宇野栄二（浪岡町文化財審議会 副会長）

葛西善一（〃〃〃 委員）

平野藤男（県立浪岡高等学校教諭）

工藤清泰（浪岡町教育委員会）

棟方牧人（浪岡町教育委員会 昭和55年度新採用）

b. 調査協力員

中谷保美、岡田康博、菊池賛治、平野敏彦（以上弘前大学四年）

c. 調査補助員

出町住子、成田富美子、平野由紀子、工藤光子（以上4名）

d. 調査作業員

秋元ヨツエ、工藤ツソ、小笠原昭子、工藤初江、猪股みつゑ、長谷川ちよ、木村栄子、石

沢ムツ（以上8名）

7) 調査の方法

a. 発掘予定面積 約100 m<sup>2</sup>

b. グリッド方式による調査を基本とするが、一部トレンチ方式を併用する。

c. 調査範囲が狭いため、テストピットを多數利用して、遺跡の層位状態・遺構の有無を確認する。

d. 実測は、平板測量と造り方測量を併用する。

e. 注記は、層位・実測図とも調査員の指示に従い、決められた様式で記載する。

f. 遺構略称は次のとおり。墻穴遺構（S T）、溝跡（S D）、建物跡（S B）

遺物略称は次のとおり。土器・陶磁器類（P）、石器（S）、鉄製品（F）

g. 整理作業は、発掘調査終了後ただちにおこなう。

h. 報告書は、浪岡町教育委員会で刊行する。

8) その他

本遺跡は、昭和52年度に県文化課によって一部調査されている。「羽黒半遺跡」

（工藤清泰）

## II 調査の経過

発掘届は、昭和55年3月14日付浪教委第508号にて、県教育庁文化課を通して文化庁長官宛提出した。同年4月28日附と55年4月17日付委保第5の925号にて届出を受理した旨の通知を受ける。

発掘調査は、浪岡町で7年計画のもとでおこなわれている史跡浪岡城跡とのかねあいもあり雪の消える4月を中心におこなわれることとなったが、調査区の選定に手間どっていたため、実際的には、昭和55年4月15日から同年4月30日までの、実質9日間の調査となった。

以下、調査日誌から経過を報告しよう。

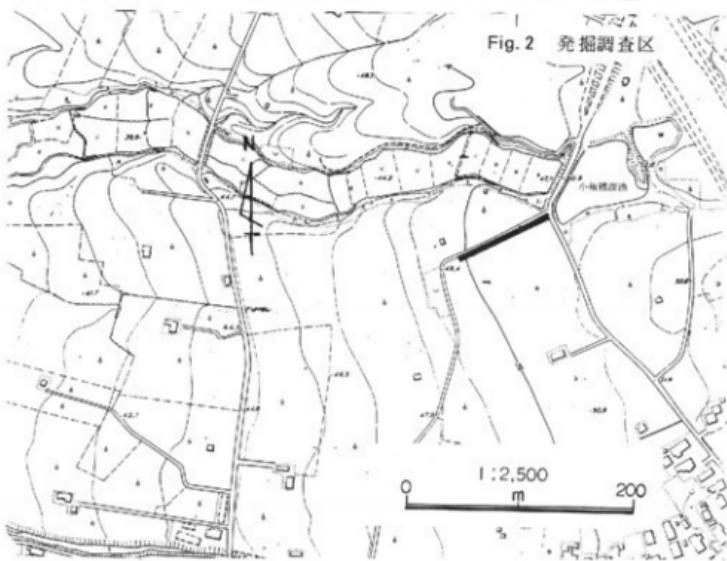
- 4月10日 第1回調査員打合せ会を開催する。調査要項についての細部の検討を加えたが、調査面積が狭少であるため、試掘的性格にならざるを得ないことが了解された。
- 4月11日 発掘調査に参加する補助員・作業員の打合せ会を開催する。日程・賃金等の諸連絡および、補助員に対する学習会をおこなう。
- 4月15日 土地改良課担当職員と共に現地へおもむき、発掘箇所の確認をおこなう。その結果、発掘調査区は現存農道の南側で幅2m以内ということになり、りんごの葉剤散布の関係で、精査終了後は直ちに埋め戻すことになった。
- 4月19日 発掘調査対象区の杭打ちをおこなう。東西に細長い場所なため、幅2m長さ70mの対象区を設定して、1グリッドを2×10mとし、東側からA～Gの7区を設定する。
- 4月21日 現地に休憩用テントを設置し、表土剥ぎを開始する。土の盛り上げ場所がないため、各グリッドを二分して東側と西側で交互に掘り下げをすることにした。
- 4月22日 E区東側から竪穴造構らしきものを検出する。ただし、柱穴等ではなく隣接する溝からの湧水が激しいため、実測・写真撮影後すぐに埋め戻しをおこなう。C区東側から焼土跡と溝状造構が検出される。
- 4月23日 B区西側から南北方向に走る溝跡を検出。G区東側からは柱穴が4個みつかった。
- 4月24日 G区西側、第I層から寛永通宝が1枚出土する。第II層からは農具の止め具と思われる鉄製品が出土している。
- 4月25日 C区西側の第III層（黒色土）から、木炭片数点、磁石、土師器が20片以上出土する。
- 4月30日 B区、C区、D区の埋め戻しを終了。発掘作業をすべて終了し現場を引き揚げる。
- 5月1～24日 遺物の洗浄、注記、実測、トレースなどの整理作業をおこなう。

（株方牧人）

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡



Fig. 2 発掘調査区



### III 遺跡の立地と環境 (Fig. 1, Fig. 2 参照)

本遺跡は、西へ緩傾斜を有する台地上に立地しているが、今回の調査区域は昭和52年度県文化課によって調査された地域から約400m北西の所にある。当時の発掘調査区域からは、多数の竪穴住居跡やそれに伴う遺物の出土がみられ、広範囲な集落跡という印象を受けていた。

実際、青森県教育委員会が昭和53年に作製した遺跡地図上からみると、本遺跡の範囲は、現在東北縦貫自動車道が走る羽黒平部落の住宅地を中心にして東西7.5kmにおよぶ果樹園地帯を包含している。しかし、今回の調査を契機に周辺の遺物分布状態を調査した結果、小板橋溜池の北側および東側では表面採集は非常に少なく、羽黒平部落の宅地から南側に集中する傾向があった。

今回の調査区域は、台地の北端にあたる場所で、東側には小板橋溜池、北側にはこの溜池の水を利用した沢田となっており、台地上面は広範囲にわたってりんご園となっている。土地の古者の話によると、りんご園以前は水田として耕作していたということで、りんご園にするため土の移動がかなりおこなわれたようである。標高は約50m、昭和52年度調査した区域との比較は-4mほどで、幅2mの既存農道に隣接する形で南側にグリッドの設定をおこなった。しかし、この既存農道の南側に隣接して幅100cm深さ50cmほどの溝が東西に走り、溜池からの湧水をもろびき、今回の調査における最大の障害となった。

周辺の遺跡としては、この台地最西端に位置する史跡浪岡城跡（中世・北畠氏の居城として有名）、浪岡川の河岸段丘上に立地する加茂神社遺跡（古代・中世）、縄文時代晚期の遺物を多量に出土したとされる羽黒平遺跡③（遺物の一部は浪岡町役場に展示中）、縄文時代後期と古代の遺物を出土する松山寺遺跡と松山遺跡（昭和54年浪岡町教育委員会によって発掘調査）、それに浪岡川を挟んで本遺跡の対岸、舌状台地上に立地する源常平遺跡（縄文時代晚期の集落と墓塚群・古代集落・中世城館の複合遺跡）など、かなりの数の遺跡が存在している。時代的にも、縄文時代から中世末期までの幅があり、特に本台地上において土師器の表採が相当量に達し、古代集落の密集地帯といえる。

現在までに、本遺跡周辺において発掘調査がおこなわれた遺跡には、天狗平遺跡（大正6年・笠井新也）、細野遺跡（昭和28年・早稲田大学）、源常平遺跡（昭和53年・青森県教育委員会）、羽黒平遺跡（昭和52年・青森県教育委員会）、杉ノ沢遺跡（昭和54年・青森県教育委員会）、松元遺跡（昭和54年・青森県教育委員会）、松山遺跡（昭和54年・浪岡町教育委員会）浪岡城跡（昭和52年～・浪岡町教育委員会）など、8遺跡が存在し、東北縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘調査が半数をしめている。

（工藤清泰）

Fig. 3 グリッド配置図

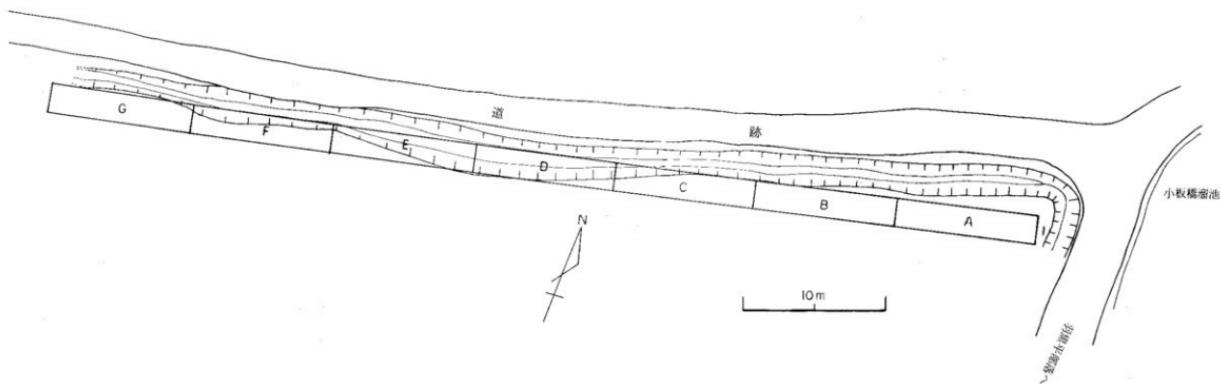
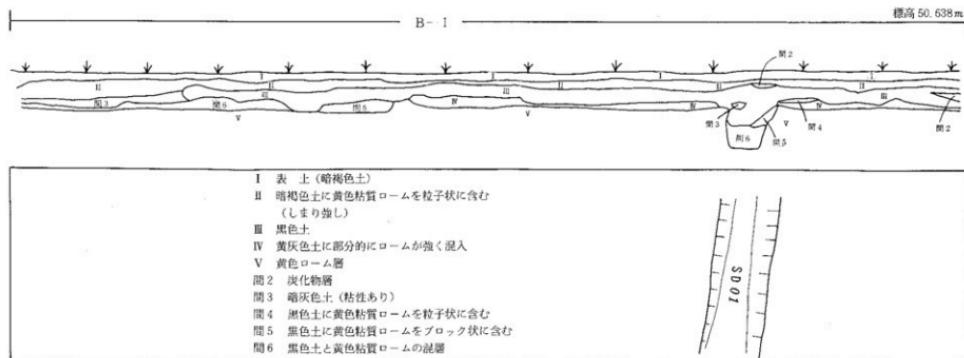


Fig. 4

(1) B-1区 南壁セクション図



(2) C-1区 南壁セクション図

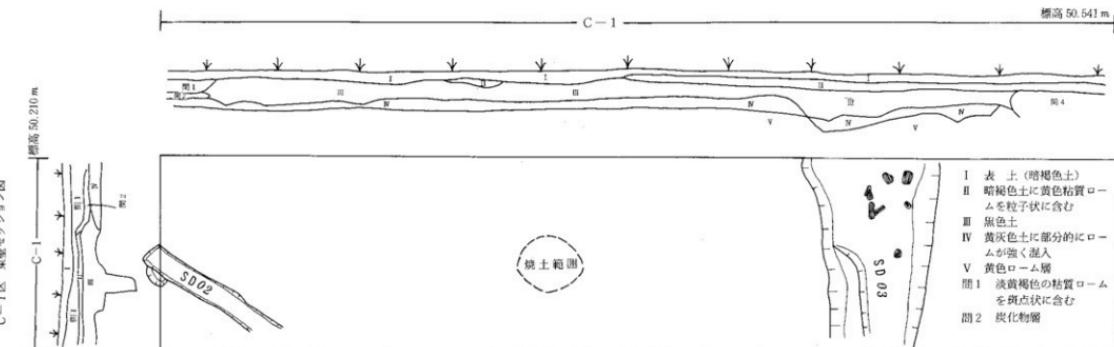


Fig. 5

(1) D-1区 南壁セクション図

D-1 標高 50.290 m

- I 表 土 (暗褐色土)
- II 暗褐色土に黄色粘質ロームを  
粒子状に含む
- III 黒色土
- IV 黄灰色土に部分的にロームが  
強く混入
- V 黄色ローム層
- 間5 黒色土に黄色粘質ロームを  
ブロック状に混入

(4) G-1区 南壁セクション図

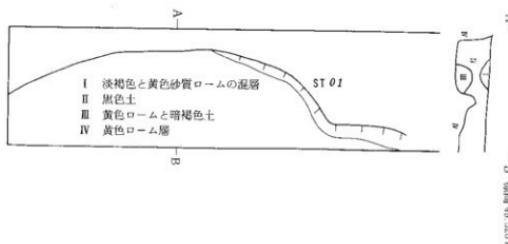
G-1 標高 50.376 m

G-1区 東壁セクション図 標高 49.676 m

G-1区 西壁セクション図 標高 49.476 m

- I 表 土 (暗褐色土)
- II 黒色土
- III 暗褐色土
- IV 黄色ローム層
- 間6 黒色土と黄色粘質ロームの混層
- 間7 黄灰色の粘質ローム

(2) E-1区 実測図



(3) F-1区 南壁セクション図

F-1 標高 50.136 m

西壁セクション図 標高 49.936 m

- I 表 土 (暗褐色土)
- II 黒色土 (しまりがあり、湿性やあり、純粋な黑色土)
- III 暗茶褐色土 (II層よりややしまりが強い、暗黃褐色土をブロック状に含む)
- IV 黄褐色土 (黒色土、及び暗褐色土をブロック状に含む)
- V 黄色ローム層

## IV 検出遺構と遺物

### (1)発掘区の層序

今回の発掘区における基本層序は、第Ⅰ層=（表土）暗褐色土、第Ⅱ層=暗褐色土の中に黄色粘質ロームを粒子状に含みしまりが強い層、第Ⅲ層=黒色土、第Ⅳ層=暗灰色土の中に部分的に黄色ロームを混入する層、第Ⅴ層=（ベース）黄色ロームの5層となる。しかし、第Ⅱ層がみられる地区は、B～D区までであり、E～G区ではしまりの強い混層がみられなくなる。この第Ⅱ層としたものは、発掘区の北側を平行して走る溝を掘り込んだ時の取り上げ土とみられるもので、第Ⅲ層が廃植耕作土としての黒色土である点からも推定にかたくない。E～G区にいたっては、溝が浅くなっているため取り上げ土が顯著にみられないと考えられる。遺物の出土状態からは、S D 03の覆土から出土した一部を除いて大部分が第Ⅰ層・第Ⅱ層の出土であることから、擾乱後の遺物の移動がかなりおこなわれたものと考えられる。

### (2)検出遺構

- S D01 B-1区西側より検出した溝で、幅115cm、深さ50cm、ほぼ磁北方向に走る。出土遺物はみられなかった。
- S D02 B-1区西端からC-1区東端において検出された溝で、幅20cm、深さ40cmを計り、東西方向に走る。出土遺物はない。
- S D03 C-1区西側から検出した溝で、最大幅140cm、深さ15cm、覆土から炭化物とともに、縄文土器（P L 5-2）と土師器甕の破片が出土している。
- S T01 E-1区東側から検出した竪穴遺構で、既存の溝によって切られていたため南壁しか確認できなかった。形状はほぼ円形あるいは橢円形と考えられ、壁面は垂直に立ち上がる。覆土から土師器甕の破片が3点出土しているだけで、機能・時期の決定資料はまったくない状態であった。新しい時期の擾乱の可能性もある。

以上のことより、今回検出された遺構があまりにも貧弱なため、本調査区が遺跡の主体部をはずれた、まったくの外郭地域であることが認識できる。

（工藤清泰）

### (3)出土遺物

今回の発掘調査では特記する程の遺物はないが、以下、出土遺物についてわざかながら項目別に記述してゆく。

#### A. 土器・陶磁器

出土した土器・陶磁器の中で、破片を含めて総量で把握した場合、土師器が最も多く、變形

・坏形が大部分である。しかし、復元可能なものは坏形の数例しか存在しない。出土状態は、遺構の数が少なかったことにもよるが、遺構に伴う事が少なく、かなり細片のものが含まれていることから擾乱が激しいことが推定された。

羽黒平遺跡では、前回の県文化課による発掘からもわかるように、土師器の量が多く、須恵器の出土量が少ない点が指摘されていた。今回の発掘は小規模なため結論づけるのは難しいがほぼ同様の傾向を呈した。

#### a. 土師器

##### i) 坏 形

Fig. 6-1 • PL. 4-3 色調は黄灰色を呈し、焼成は不良で、内外面共ロクロによる成形を行ない、内面はナデにより調整されている。胎土には白色の小石を含み、器厚は薄く、口縁の立ち上がりはほぼ真直ぐである。

Fig. 6-2 • PL. 4-4 ロクロ成形であり、内面は指ナデによる整形。焼成は不良、胎土には石英質の小砂及び、小石を含む。色調は暗い黄灰褐色で、器厚は肉厚、口縁は丸味を欠いて直線的である。

Fig. 6-3 • PL. 4-5 色調は黄灰色で、外面は口縁部直下に、内面は口縁部から底部にかけて部分的に煤が付着している。ロクロ成形により、内面は指ナデ整形である。焼成は不良、胎土には黄白色の小石を全般に含む。底部に直径 1.3 cm 程の穿孔らしきものがある。口縁の立ち上がりはほぼ真直ぐである。

Fig. 6-4 黄白色の色調で、胎土には石英質の小砂を若干含む。外面にはロクロ痕があり、内面はナデによる整形である。焼成は不良。

Fig. 6-5 くすんだ黄灰色を呈し、胎土には石英質の小砂を含み、焼成は悪い。外面は欠損のため不明だが、内面にはロクロ痕が明瞭であり、底部内面の中央部が盛り上がっている。器体は肉厚で回転糸切底である。

##### ii) 養 形

Fig. 7-1 色調はやや赤味を帯びた黄灰色である。焼成は良好で、ロクロによる成形をしており、内面はナデ整形である。胎土には石英質の小砂を混入する。口縁部は立ち上がりから緩やかな「く」の字形に外反する。

Fig. 7-2 • PL. 5-3 黄灰色を呈し、胎土には白色砂、石英質の小砂を混入する。ロクロ成形であり、内面は躊躇ナデ整形である。焼成は良好である。頸部がやや薄く、口縁部は立ち上がりから「く」の字形に外反する。

Fig. 7-3 小型の養である。暗い灰黄色の色調を持つ。胎土には石英質の小砂を含む。ロクロによる成形、内面は、指ナデによる整形である。口縁部はやや外反しており、焼成不良。

Fig. 6

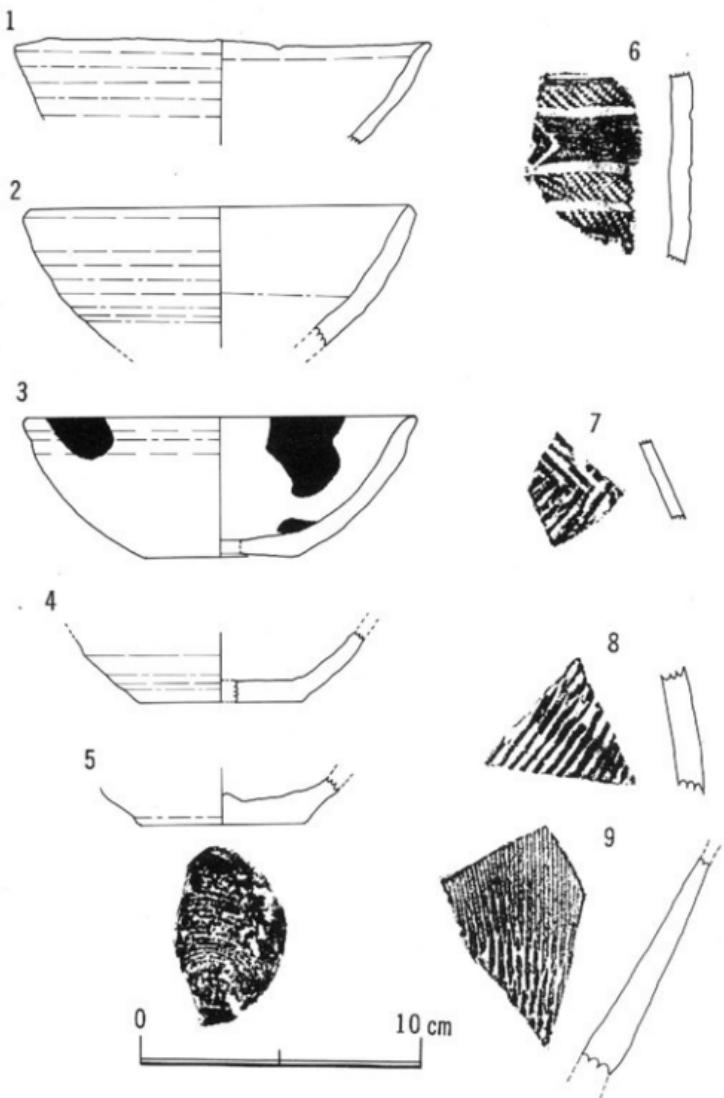


Fig. 7 - 4 全体的に黄褐色を呈し、胎土には石英質の小砂を含み、焼成はあまりよくない。ロクロ成形であるが、成形後、指ナデしており、内面は指ナデによる整形である。しかし、製作に関しては難な印象を受ける。

b. 須恵器

須恵器については、今回の調査では特に出土例が少なく、3片の出土であった。

i) 壺形

PL. 5 - 6 色調は暗灰色で、ロクロ成形によっているが、内面には特にロクロ痕が明瞭である。糸切底であるが、切り放しが不良のため凹凸があり、かなり雑な仕上がりとなっている。胎土には微小な石英質の砂を若干含む。底に「十字」の火だすき痕がある。

ii) 養形

Fig. 6 - 7 青灰色のくすんだ色調を呈し、胎土には石英質の微小な砂を若干含む。外面には交叉状の叩き目が施されている。器厚は薄手である。

これに対し、Fig. 6 - 8 • PL. 5 - 5 は同種の破片ではあるが、器厚は厚手であり、外面の叩き目は単に斜行している。また、内面にも同様の叩き目が施されており、この叩き目をつぶしている部分がある。色調・胎土に関しては前者と同じである。

c. 陶磁器

i) 施釉陶器（擂鉢）

施釉陶器としては、擂鉢が1片出土している（Fig. 6 - 9 • PL. 5 - 7）。赤褐色を呈する胎土にこげ茶色の釉を内外面に施している。焼成は良好で硬質感があり、むろし目が細かい（交叉状）点から判断して、時代的に新しいと思われる。

ii) 染付

染付は4片の出土である。その中で器形の確認できたものは、伊万里系の碗（PL. 5 - 8）だけである。外面には梅花文が施され、内部はくすんだ藍色をしている。

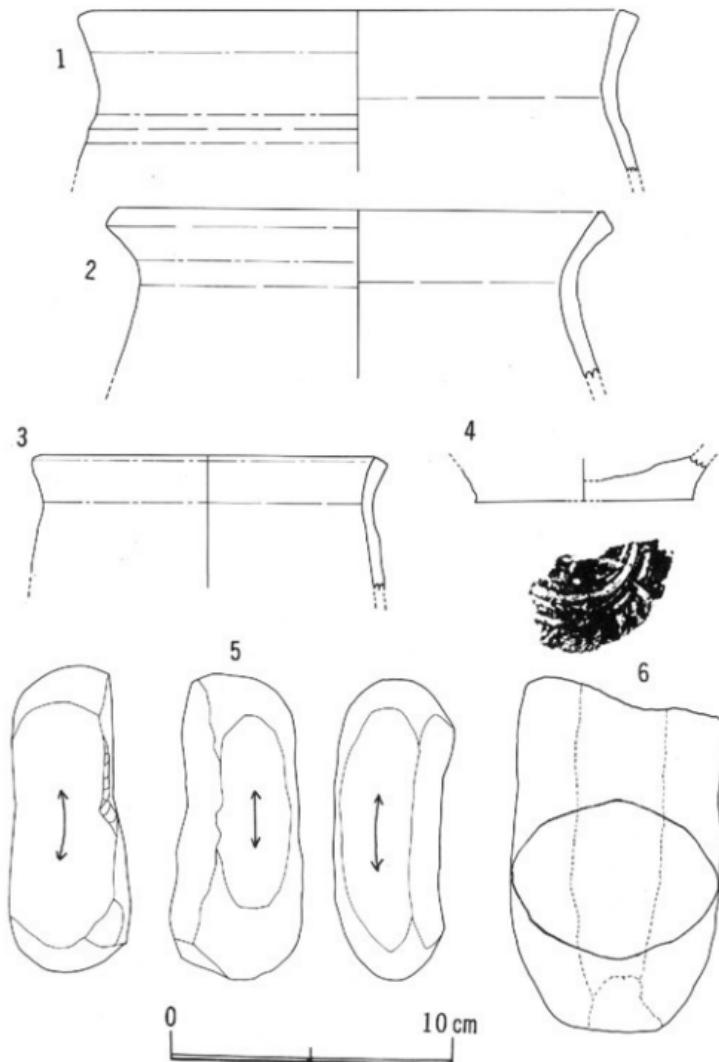
d. 繩文土器

4片の出土。時期は、縄文中期～後期で、C - 1区、S D - 03から出土した以外はいずれも第I層から出土している。こうした状況から判断して、本調査区の近くに縄文時代の遺跡が存在する可能性を有する。

Fig. 6 - 6 • PL. 5 - 1 は、暗い黄褐色を呈する深鉢の胴部片で、縄文後期初頭のものと考えられる。外面に、磨り消し縄文が施され、4本の沈線によって区画されている。胎土には石英質の小砂を含む。

PL. 5 - 2 は、円筒土器胴部片で、外面には、多軸燃系文が施されている。時期は縄文中期と考えられる。内面は黒くなっている。

Fig. 7



## B. 鉄製品

鉄製品は、PL.5-9の両衛鉄製品と、PL.5-10の止め具の2点だけが出土した。前者は草刈機の刃のようであり、後者は、鍬等の農具の止め具と考えられる。

## C. 古銭

古銭は寛永通宝(PL.5-11)1枚の出土である。

## D. 石製品

総数で7点の出土である。

Fig.7-5・PL.5-12は、砥石であり、三面に磨耗した擦り痕がみられる。

Fig.7-6・PL.5-13は、砲弾状石製品であり、頭部から11.73cmの部分で残部が欠損している。石棒の可能性があり、縄文時代の遺物であろうか。  
(棟方牧人)

表I 出土遺物 捕図・図版対比表

Fig.No	PL.No	遺物No	名 称	形 状	部 分 名	出 上 区	層位	特 徴
Fig.6-1	PL.4-3	P43	土師器	環形	口縁部	C-1	表採	ロクロ成形、内面：ナデ整形
-2	PL.4-4	P1	"	環形	"	E-1	第I層	ロクロ成形、内面：指ナデ整形
-3	PL.4-5	P22	"	環形	約4分片	C-1	"	ロクロ成形、内面：指ナデ整形、部分的に媒付着、底部に直径1.3cm程の穿孔存在
-4		P44	"	環形	底部	C-1	"	外面にロクロ痕、内面：ナデ整形
-5		P223	"	塊形	"	C-1	"	内面にロクロ痕明瞭、回転系切底
-6	PL.5-1	P201	縄文土器	深鉢	胴部	C-1	"	外面に擦り消し縄文が施され、4本の沈穂によりX面、縄文後期
-7		P273	須恵器	雙形	肩部	B-1	"	外側：交叉状の叩き目、器厚：薄手
-8	PL.5-5	P176	"	"	"	E-1	表採	内外面ともに叩き目が施されている。叩き目は単なる筋行、窓溝、厚手
-9	PL.5-7	P240	施釉陶器	加鉢	胴部	"	"	内外面ともに施釉、おろし目が細かく交叉状、硬質感あり、新しい。
Fig.7-1		P81	土師器	疊形	口縁部	C-1	第I層	ロクロ成形、内面：ナデ整形、立ち上がり緩やかな「く」の字形に外反
-2	PL.5-3	P45	"	"	"	C-1	"	ロクロ成形、内面：指ナデ整形、立ち上がり：「く」の字形に外反
-3		P36	"	"	"	C-1	"	ロクロ成形、内面：指ナデ整形
-4		P257	"	"	底部	"	表採	ロクロ成形、内面：指ナデ整形
-5	PL.5-12	S6	砥 石		C-1		第III層	三面に磨耗した擦り痕
-6	PL.5-13	S2	砲弾状石製品			E-1	第I層	頭部から11.73cmの部分で残部欠損、石棒の可能性を持つ。縄文時代？
PL.5-2	P261	縄文土器	深鉢	胴部	C-1	SD-03 覆土 文中期	内筒土器、多軸燃系文、内面黒色。縄文中期	ロクロ成形、系切底、「十」字火だしき痕
PL.5-6	P175	須恵器	環形	底部	E-1	表採	伊万里系、梅花文、色調はくすんだ藍色。江戸時代初期か？	
PL.5-8	P177	磁 器	碗	口縁部	E-1	"		
PL.5-9	F1	両衛鉄製品			G-1	第IV層	草刈機の刃か？	
PL.5-10	F2	止め具			G-1	第I層	鍬等の農具の止め具	
PL.5-11	C1	寛永通宝			G-1	"	江戸時代	

## V まとめ

### 〔遺跡〕

羽黒平遺跡(I)は、土師器・須恵器を伴出する古代末期の集落跡としての性格が主体であり、繩文時代早期から晩期、また弥生時代にいたるまでの長期間にわたって人間の営みがおこなわれていたと推定されている。(注1)特に、羽黒平部落を中心とする台地上では、前述したように各時期の遺跡が点在し、浪岡川および美人川を主な水源とする集落が継続発達してきたものと考えられる。

今回の調査対象区が、遺跡の主体部分を外れたこと、調査区域があまりにも狭小であったことなどから、十分に調査意義が存在したか疑問となるところであるが、少なくとも表採品を含めた出土遺物の中で、昭和52年度調査区において出土した土師器と同種のものが検出されていることは、広い意味で集落の一一部と理解される。また、前回の調査時にも指摘されていることであるが、台地上における日当りの条件と南側を流れる美人川の水利条件などから、台地南側に集落の主体部分が存在し、北側では遺構の存在が薄いとされていた。この事は、今回の調査でもある程度立証されたわけで、今後他の集落跡の立地条件を考える場合、生活範囲および生活機能の問題を提起している。

### 〔遺物〕

出土遺物の中で、土師器は壺形・甕形の二形態より知られないが、壺形に関しては成形にクロを使用し、口縁部の外反が顕著にみられないものが大部分である。焼成も不良なものが多く、内面黒色処理がなされているものは2~3点あるのみである。甕形に関しては、全形を知り得るものは一点もない。口縁部の外反も緩やかなものが多く、焼成もバラエティーに富み色調が赤褐色を呈するものから、黄白色を呈するものまである。両者とも、成形は粗雑な印象を受ける。

須恵器は、叩き目を有する甕形の胴部片があるだけで、焼成・色調から前田野目窯系のものと考えられ、近接地からの搬入品であろう。

古代の遺物として理解されるのは、土師器と須恵器だけで、施釉擂鉢片・伊万里系の染付磁器・寛永通宝等の出土から近世以降の集落跡も、現在の部落上に立地していた可能性が高く、本調査区もその生活範囲に含まれていたと考えられる。

縄文土器は、細片のため別の場所から持ち込まれた可能性が大で、集落跡の存在は薄いと思われる。

(工藤清泰)

(注1) 青森県教育委員会 1979 「羽黒平遺跡発掘調査報告書」

<参考文献>

- 国土地理協会 1975 「埋蔵文化財 発掘調査の手びき」  
青森県教育委員会 1979 「羽黒平遺跡発掘調査報告書」  
浪岡町教育委員会 1978 「史跡浪岡城跡発掘調査報告書」  
" 1980 「史跡浪岡城跡発掘調査報告書（Ⅱ）」  
" 1980 「松山遺跡」  
青森県教育委員会 1979 「浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書」  
" 1979 「松元遺跡発掘調査報告書」  
" 1978 「源常平遺跡発掘調査報告書」



1. 発掘区遠景（東より）



2. 昭和52年発掘区遠景



3.  
発掘区全景



4.  
埋め戻し終了後の状況



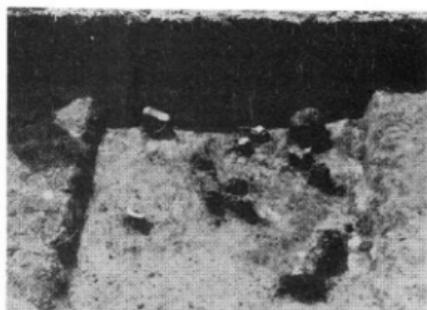
1. B-1区SD 01検出状況



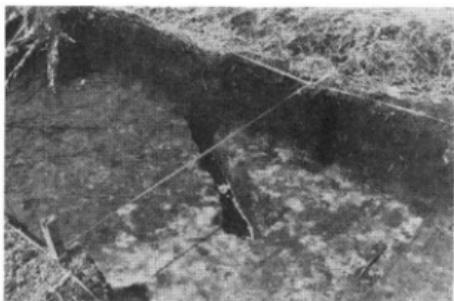
2. 同 完掘状態



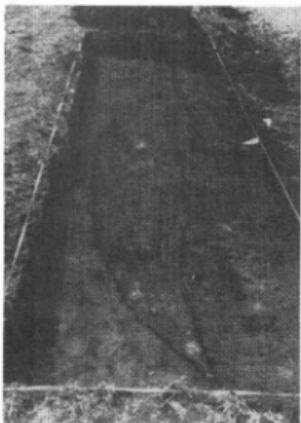
3. C-1区SD 03完掘状態



4. C-1区SD 03遺物出土状態



5. C-1区SD 02完掘状態



1.  
E—1区  
竪穴遺構検出状況



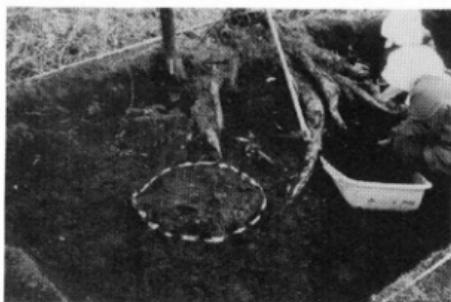
2.  
同  
掘り下げ状態



3. E—1区 竪穴遺構全休図



4. G—1区 柱穴検出状況

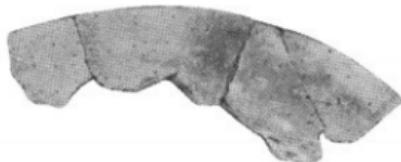


1. C—1区 烧土检出状况

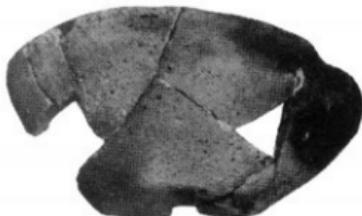


2. C—1区 第I层遗物出土状态

3

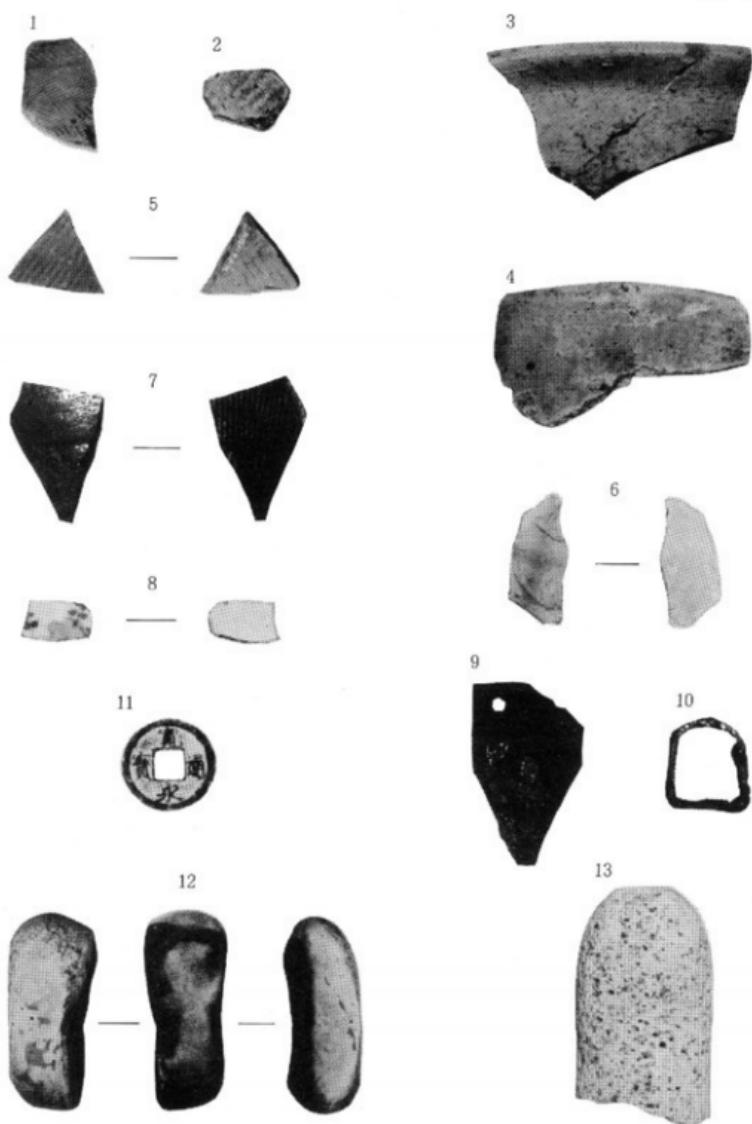


5



4





発行 浪岡町・浪岡町教育委員会  
印刷 銚津輕新報社  
昭和56年3月31日

